

研究して居る所が萬國の政治的現象を總括して抽象的に地理學上より説明をして居る學科はあるかと云ふと、今日まださう云ふものは無い、漸く數年前に此事に付て新しい學派が出來たのであります、成るほど地理書を開けて見ますれば各國の政體に付て各々説いて居る所もある、それは其人種の社會的舉動又政治的現象を個々別々に説いてある併ながら是等人類なるものは地理上ドウ云ふ政治的團體を作つて居るか、ドウ云ふ人類がドウ云ふ思想に富んで居るか、其間にドウ云ふ關係があるかと云ふことに付て地文學の中から眞理を見出してそれを總括した所の抽象的學科は無かつたのでございます、それが漸く近年出て來たのであります、それに付て御話しを致さうと思ひます

雜 錄

南鳥島航海日記

天 外 生

偶々帝國軍艦高千穂の南鳥島に派遣せらるゝに當り海軍省に請ひ便乗の榮を得該艦艙以下艦員諸君の懇切なる待遇に由り充分に研究することを得たるは深く謝する所なり
八月二十二日 學友金原學士と同行し横須賀軍港に到り神保博士を待つこと時余にして博

士は志賀代議士矢津昌永二氏と相携へて下車せられ直ちに邊見波止場に行けば海軍少尉尾中諦治君一行を豫ねて鎮守府より廻されし小蒸汽船に案内し出港準備を整へ港内に碇泊する所の本艦に導かれたり便乗者は神保博士志賀代議士矢津昌永君時事新報記者宮本君東京朝日新聞記者上野君及び南島嶋の事業者上瀧七五郎氏を合せて八名なりき乗艦するや航海長滋賀大尉一行を士官室(ワイルム)に導き新聞社員及上瀧氏は士官病室(メッスル)に副長以下艦員諸氏に紹介せられて后ち艦長余等を接見し艦内心得を話されたり終て名々に士官自室を貸與せられ過分の待遇を與へられたるは一行の謝する所なりき而して今回本艦の艦員總數は艦長梶川大佐副長東郷中佐機關長加納機關中監航海長滋賀大尉砲術長吉岡大尉水雷長淺川大尉第二分隊長山下大尉外波大機關士軍醫長隱岐大軍醫航海士橋本中尉海軍少尉原尾中權藤王氏西村少機關士佐々木少軍醫以下艦員三百有余名と聞けり

午后五時の一點鐘を報するや黒煙天に漲らし碇泊の諸艦に告別し軍港を後にし南溟の空に向ひ港口を出で第二第三の海堡間を過ぎ浦賀灣を右に望み房州の岬を雲烟の間に認め何時しか野島岬の燈光海波を照らし明月東天に昇り金波靜にして愉快なる航路を艦員諸氏と后甲板上に談笑しつゝ進みたりき

八月二十三日快晴 午前九時と覺しき頃八丈島の北端を認めたり海岸は斷岩絶壁にして避迫地に乏しきが如し午後零時十五分頃正南に有名なる鬼ヶ島てふ青島を認めたり艦漸く

近づくに従ひ双眼を手にし眺むれば奇岩絶壁山峰圓錐形を呈し大火口の跡らしきを認めたり島人にやあらん三艘の漁舟を程近き所に浮べ居たれば若しや鳥島の模様や知りつらん奇しき事とも聞かれやせんと汽笛を鳴らして呼び寄せしに美鬚の快男子佐々木平吉と云へるもの頭領らしく指揮官となりて漕ぎ來りぬ彼等に問ふも鳥島の噴火したることもし知らず此島にも變動なしと云ふ本島の住民は五百餘名にして漁業を職とす本島は横須賀を距ること百六十七哩にあり安永の頃噴火したることありと云ふ

午後五時頃にベヨチース列岩を認めたり岩は三四個突出するもの、如し此險岩を避けスミス島を迂廻して鳥島に向へり明月高く中空に輝き清風遠くより來り涼氣を覺へ快談絶へず明日何時頃鳥島を認むるやと各自心に待ちつゝ甲板上に逍遙す

八月二十四日快晴 午前五時十五分漸やく東天紅を告ぐる頃ひ前橋上より左前方に陸地を見るの報あり人々吾れ先きと橋下イッダに打寄り眺むるも悲哉吾人門外者には専門家の如く眼力届かず之を認められざりしも進航するに従ひ鳥島の全景を遠くに認めたり時正に五時三十分頃なりき同七時頃十里の沖合遙に鳥嶋を望むに二條の水蒸氣立登り或は濃く或は淡く時々變化し實に凄然たる有様にして望遠鏡を取りて觀るに海圖上に記されし中央に秀てたる山顛を缺損したるもの、如し八時頃右舷に當り海原遙かに黒煙を漲らし三橋を備へし一汽船を認めたり是れぞ同日に横濱を出帆し大森田中館兩博士其他鳥嶋探檢者を

便乗せしめたる兵庫丸なりき本艦は同十時鳥嶋千歳灣沖一哩余りの處に漂航し兵庫丸は嶋西方に漂ひ吾等より先きに端艇及漁船を出し殘草の存する裏手の山より上陸を企てたり本艦よりは第二カッター及び和船一艘を下し便乗者五名及び淺川大尉隱岐大軍醫外波大機關士等はカッターに乘じ原少尉艇長たり和船には尾中少尉船長とし權藤少尉新聞社員の一行程を乗せて千歳灣頭に漕付け敵前上陸を試みたるに一たび失敗し東方に轉し上陸せんと海水に飛び込み上陸したるは午前十一時頃なりき原少尉は一行を上げて後ち錘鉛を投し深淺測定の任務に就かれ一行は噴火口さして前進す時に西方の高き所に日章旗を懸かへせしものあり是れなん大森博士田中館博士の兵庫丸に上陸差支へなしと云ふ信號を爲せしものなりきと千歳灣の西方數町の處に一の入江あり深さ三四十尋灣入約百米幅四五十米に達し今回噴火の爲めに陥落し海中に三個の温泉を生し爲に海水の温度を高む之を望みつゝ火口壁上に進み外波大機關士金原學士噴火口の景を撮映せられたり時に兵庫丸の便乗者一二名來り梨子を與へられたるは衆の喜びし所なりき神保博士金原學士と三名は一行に分れ西方の高き所に進み火口の全景を視察し明治灣に降りカッターに乘り本艦に歸り艦長の命にて鳥嶋遭難者の爲めに哀の譜を奏し其靈を慰め午後五時十五分南鳥嶋に向ひ出港せり薄暮驟雨劇しく暑熱散し涼氣加はり心氣壯快を覺ゆ號令の下に衆皆雨に打たれて水浴したるは實に愉快にして陸上の人の知らざる興味あることなりし

八月二十五日及び同二十六日　の兩日は陸影を見ず洋上を進行するのみ驟雨襲撃するごに衆皆沐浴の樂を俟ちしも其興を取る程に至らずして止みたり

八月二十七日　前日と同しく陸地を見ず風位變し艦の動搖を覺ゆ此日時針一時間を遅らたり

八月二十八日晴　波高し午前九時半頃左舷に當り陸地見ゆるの報あり樹木青々と繁れるさ島を認め近くに從ひ無數の鳥飛び通ひ純白の砂濱と綠樹の影と相對稱して絶海の一景を呈す笠置艦乗組海軍中尉秋元秀太郎氏は島上に軍艦旗及び日章旗を掲げ本艦を歡せらるゝが如く直ちに信號を爲しギグを飛ばし本艦に訪門せられたり聞くに米船は既來り事便じて去れりと是れが爲め本艦も亦碇泊するの必要なきに至れり是れが爲めカッター二艘和船一艘を下し便乗者を上陸せしむると共に笠置の殘留者の舍營を解き物を運搬するとなれり然れども一日にては盡く運ぶと能はざれば翌朝に讓られたり乗者一行は陸上に一夜を明かすとしてカッターに乗り島に上陸を試みしも波濤高くに近くと能はず和船に轉乘し珊瑚礁の間を漕き辛ふじて上陸し水谷氏の事務所に至り々の物語りを聞さし后ち永田某氏に案内を請ひ島を横斷し樹林の間を逍遙し或は水浴を試み或は鳥など捕へ或は之を放ち島の半を巡りて南海岸に出れば一の墓地あり是れな渡航者の病死せしものを埋め形ばかりの墓標を建たるのみ休憩數刻墓前に吊意を表し

歸り笠置殘留者の天幕内に一夜を明かしたり蚊軍蚤軍に攻められず島内に毒虫なく管小なる羽虫の來襲すると宮本記者の氣焔に苦みたるのみにて天幕内の愉快云ふべからず

八月二十九日晴 早朝蹶起してビスケットとミルクとを食し島巡りと出掛け大鷲神社琴平神社に參拜し島を一周し午前十一時本艦に歸る海上前日より荒く錨綱を斷ち水兵海中に飛込み必死の働きを爲したり 午後一時四十分小笠原島に向て發程す順風に帆を揚げ速力増加したるも薄暮驟雨甚しく電光閃き艦の動搖甚しく二十度以上の傾斜をなす聞ならく此日兵曹一名病死したると實に國家の爲に悲むべきの至りなり

八月三十日 終日風力強く波浪高く動搖甚たしく驟雨來り襲ふこと例の如し

八月三十一日 前日と同じ時計を本邦標準時に改正す

九月一日 未明より驟雨頻りにして二百十日の危日にや天候不隱の兆あり午前十時五十分驟雨中父島二見港内に投錨す晝食后上陸し某旅館に投す

二見港は灣内廣くして水深く大艦巨舶の碇白に適す上陸地は大村にして島廳裁判所郵便局小學校等あり小笠原群島中の首府とす右方に奥村とて歸化人村あり前方には扇村とて舊島廳のありし所あり

九月二日 天氣晴れたり鳥廳技師某氏に導かれ奥村釣濱、宮浦、扇浦等を巡回す此日軍艦を見物せんとて老若男女四方より來る此夜本艦に歸る

島内の家屋は一般に矮小にして屋根は枇榔の葉にて葺き、壁及び板圍にも之を用ゆ疊を敷かず板間のみなり物産は砂糖、香蕉、鳳梨、檸檬、林投樹、編物、鱒、鱒、鱒等シヨウゴボイを主とす

九月三日晴 午前九時拔錨父島を辭し歸港の途に就き速力を増し再び鳥島に向ふ是れ最近の模様を見んが爲なり此日風強らずと雖も波高く艦体の傾斜二十四、五度に及べり

九月四日 午前五時頃鳥島を見る午前七時鳥島を一湮以内に見るに前日より勢衰へたるが如く水蒸氣減少したるを覺へたり 午後五時頃青ヶ島を左舷に眺め同八時二十分頃八丈島を遠望して去る此日浪高く動搖益々甚し

九月五日 未明に細雨來りしも后晴れ艦は伊豆大島を左舷に見て進み早くも劍崎に近づき佛國郵船と并行し遂に彼の航過する所となる第二第三の海堡も過ぎ午前九時四十六分目出度横須賀港外に投錨す港内に八雲常盤の諸艦あり余は午后一時高千穂艦を辭し尾中少尉に導かれ常盤艦を參觀して后金原學士と俱に京地に歸る此航程二週日と一日を費す
今回航程湮數を擧ぐれば左の如し

横須賀八丈島間	百三十五哩	横須賀スミス島間	二百九十四哩
八丈島青ヶ島間	三十二哩	鳥島孀婦岩間	四十五哩
青島鳥島間	百四十二哩	孀婦岩二見港間	百八十三哩
鳥島スミス島間	五十八哩	二見港南鳥島間	六百六十哩

鳥島及び南鳥島記事は他に之を記載せらるゝものあるべきを以て之を略したり

歐洲航路諸港雜記

星 槎 生

コロンボは横濱を去る四千八百九十六哩にして錫蘭島の西岸にある首府なり北緯六度五十七分東經七十九度五十分に位し其廣は六千四百十五エーカーにして之を九區に分つ此の地は今を去ると大約四百余年前始めて葡萄牙の所屬に歸し後和蘭の領地となり其後一千七百九十六年更に英國の叛圖に歸せし者なりと云ふ本島は彼の釋尊降誕の地にして島中數多の有名なる寺塔ありカンデーにあるものは其尤も著名なる者なりと云ふ或は云ふ釋尊は本島に生したるにわらず僅に其晩年に至り布教の爲め一二回當島に來りたる者なりと云ふ人口凡十八万余本島の地勢は南方一帶印度洋に面し西南信風の季に至れば諸船の繫留に適せざりしも一千八百八十四年英國政府は南方に長さ一マイル余高さ十二呎干潮時たりとも水面を抜くとの防波堤を築きてより終に本港をして人工的屈指の良港となせり然れども沿岸は濤甚だ靜ならざるを以て浪波常に防波堤に激し上りて數十尺の高に達し散じて水煙となり集て瀑布となりて港内に灌落す其狀恰も水雷の爆發せしか如く其壯觀奇景能く筆語